31P-0934

大阪道修町における薬種扱いの変遷（1）　―薬種業から化学工業へ―

◯多胡　彰郎[1], 宮崎　啓一[2]（[1]長岡実業, [2]三栄化工）

【目的】かつて「くすりのまち」大阪（または大坂）道修町は、薬種の取扱いに端を発する企業の集まりであった。先に宮崎らは明治期以降の大阪道修町における薬種から試薬および香料の取扱いに転じた薬業家に関して報告した [1,2]。今回道修町の多くの薬種業者のなかにあって、化学工業品への取扱いに転じた薬業家について調査・検討を加えたので、その結果を報告する。

【方法】既存資料の再検討および実地踏査等による資料の収集・確認によった。

【結果および考察】古来大阪には薬の流入をうかがわせる歴史上の背景が存在する。薬種の取扱いに端を発した薬業家を中心に発展したかつての道修町と化学工業との関わりには、明治期の薬事制度の整備と医制発布等による洋医の増加に伴う洋薬の消費および政府の殖産興業下における化学工業薬品の製造・使用の増加によるものがあげられる。道修町において、薬種から化学工業品の取扱いに転換したものとして、乾 卯兵衛創業（1855 年）による乾卯商店（イヌイ株式会社）、小西 儀助創業（1870 年）による小西儀助商店（コニシ株式会社）および奥野 藤吉創業（1905 年）による奥野商店（奥野製薬工業株式会社）等が知られる。これらは薬種の取扱いを中心とした道修町における化学工業品取扱いの製造業者である。今回演者らはこれらを薬種から化学工業品取扱いの転換のモデルケースとすることに意義深いものがあると考え、薬種業および化学工業との関連を検討することとした。

【文献】1）宮崎 啓一、宮本 義夫、三島 佑一、“大阪道修町における試薬業界の変遷（２）　―薬種業から試薬業へ―”、日本薬学会 2010 年会（岡山）講演要旨　2）宮崎 啓一、多胡 彰郎、“香料業界の歴史的変遷（２）　－大阪道修町をめぐる薬種および香料について－”、日本薬史学会 2010 年会（東京）講演要旨